

彼の試みは体験と記述の問題そのものを浮き彫りにし、そしてひとつの指針を示している。その全体像は文学と詩を終着点としてみることで初めて明らかになる。本稿では詩の考察までは至らなかったが、体験と記述の問題における詩の在り方を明らかにすることで、内的体験の考察に記述の側面から迫ることが可能になるだろう。

ハンナ・アーレントにおける「赦し」論の展開

本間 美穂

ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-75) は、主著『人間の条件』(一九五八年)第五章三十三節「不可逆性と赦しの力」において、「赦し forgiveness」について論じている。アーレントの「赦し」について論じる場合、『人間の条件』を参照することが一般的である。しかし、同書の「赦し」論に対してこれまでさまざまな批判がなされてきたように、この箇所にもみえ隠れするのでは、アーレントの「赦し」論の意義を十分に理解することは難しいと思われる。そこで、本発表では、『人間の条件』以降のアーレントのテキストから「赦し」に関する記述を取り出して整理し、「裁き (= 判断) judgment」との関連の下に分析する。これにより、アーレントの提示する「赦し」の意味と意義をより明らかにすることを試みる。

まず、アーレントにおける「裁き」と「赦し」の差異と関係について考察する。ここでは、一九六〇年頃になされたW・H・オーデン (Wystan H. Auden, 1907-73) との議論と、「ベルトルト・ブレヒト」(一九六六年)を考察の対象とする。こ

こで明らかになることは、アーレントにとって、「裁き」とは、行為を対象とし、同じ行為であれば行為者が誰であっても同じように裁くという意味で「平等」なものであるのに対し、「赦し」は、「何が行われたか」ではなく、「誰が行ったのか」が重要となるものであり、この意味で「不平等」なものだということである。アーレントによれば、「裁き」と「赦し」は同じコインの裏表の関係にあり、あらゆる「裁き」は「赦し」へと開かれている。すなわち、「裁き」の平等性が破れ、行われたところのものではなく、行った人が問題となる地点において、「裁き」は「赦し」へと移行するのである。

ところで、アーレントは、『人間の条件』以前のテキストから一貫して「裁き」と両立可能な「赦し」を求めている。この背景にあるのは、『イェルサレムのアイヒマン』(一九六三年)などで展開される批判、すなわち、「裁く私は誰か?」「自分も同じ状況では同じことをしたかもしれない」などと自己反省し、「皆等しく罪を負う」ものとすることによって、特定の個人に責任を負わせないようにする傾向への批判である。アーレントは、オーデンとの議論の中で、「隣人愛」に基づく赦しに否定的である。それは、ここでの「隣人愛」を「人間の罪深さや、罪びととの連帯を前提」するものと理解し、「裁く私は誰か?」という精神で赦すことによって裁く力が損なわれてしまうことを問題視していたからである。

では、アーレントの「赦し」は、どのような愛に基づくものだろうか。それは、『精神の生活』(一九七八年)などのテキストにおいて、アーレントがアウグスティヌスの言葉として繰り

返し「引用」する言葉、すなわち「愛するということは、あなたが存在することを欲することである *Anno Volo ut sis*」という一節に手がかりがある。この愛は、他者の存在を肯定することを意味し、他者と私を結びつけるものとされる。アーレントの「赦し」は、このような愛に基づくものである。また、ここには、アーレントの「連帯」観が示されていると言えよう。

メルロ・ポンティと祈り

松田健三郎

メルロ・ポンティはフッサールの成し遂げた成果の一つとして、アウグスティヌスにその典型をみるような、自己への帰還がそれ自体の惹き起こす逆方向の運動によって引き裂かれること、すなわち「自己への帰還」と「自己からの離脱」の同一性の発見をあげる。しかし、フッサールは、同じく、アウグスティヌスをそこにみているであろう宗教的回心をこえた意味——人類そのものに課せられている最も大きな実存の変化——を現象学的態度とそれに所属している判断中止に付与する。メルロ・ポンティの立間に即していえば、「自己への帰還」と「自己への離脱」という逆方向の運動の同一性にその意味は付与される。では、この逆方向の運動として理解されるものは何か。フッサールのことばに託して、メルロ・ポンティのいうところでは、「反省することは、反省されていないものを露わにすることである」ということになる。いわゆる反省——世界への自然的な関わりをも一つの態度として、いいかえれば、諸作用の一団として論ずるそれとは異なり、フッサールの反省はあらゆる物の

包括的な取り上げ直しを試みながら同時に「あらゆる定立の手前にあるような総合」に眼を向ける。そこは、我々のもつとも自然な生活であり、存在論的には即自的なものの境域とは違つた、それゆえ構成の秩序からいっても即自的なものからは導き出されないような境域を志向する——自然的態度である。しかし、この自然的態度は、それが自然主義的定立になる場合にしか一つの態度になることはない、という。いかなる明晰判明の用語にも翻訳されない根源的臆見の場だからだ。臆見の明・暗の中で、世界を包み隠すことによってこそなされる世界の開示！ したがって、超越論的態度も、また、なお依然として自然的ということになる。他ならぬその両者のはざまをこそ前進すべく試みなければならぬ、といわれる所以である。逆方向の運動、「自己への帰還」と「自己からの離脱」の同一性とは、かかる謂いなのである。

翻って、アウグスティヌスの自己への帰還についていえば、それは『告白』の「オステイアの直視」にみるように、「*totu actu cordis・cogitatione* (一への希求) / *modice・rapida* (自己の分裂)」の図式に貫かれている。また、『三位一体論』第八巻について、「真、善、義、愛などの根本語をめぐるアウグスティヌスの直視失敗を次々と描いてみせる壮大な絵巻物にたとえられよう」といわれるが、その直視失敗に暴露される、心と身体の分裂こそが、「ロゴスはサクルス(肉)になった」(ヨハネ1・14)を契機として、全体的人間の成立へと逆転し、機能しはじめるのであった。このようにみてくるとき、アウグスティヌスの自己への帰還は、メルロ・ポンティのいう自然的態度